西二葉町遺跡発掘通信

No.12
令和7年
10月号

地元説明会を開催しました。

ようやく秋の気配が感じられるこの頃です。

去る九月十三日（土）と十四日（日）の二日間、地元説明会を開催いたしました。両日とも午前と午後に、合計四回の現場見学・遺物解説を実施しました。二日間の合計で五百十一名もの方々に御参加いただきました。これほど多くの方々に関心を持っていただけたこと、スタッフ全員、心より光栄に存じます。ありがとうございました。

また、九月四日（木）と十一日（木）には、明和高等学校附属中学校にて、一年生全員を前に発掘調査に関する授業を行う機会を得ました。四日は「考古学の調査」に関する授業、十一日は発掘調査現場にて遺構や遺物を観察する授業でした。いずれの授業も、熱心に聞いていただけました。折しも九月下旬から中学校校舎の前にある25B区での発掘調査が始まる前に、考古学に関する授業をさせていただけたことは、誠に幸いでした。

遺跡の発掘調査の実施については、明和高等学校および附属中学校の皆様をはじめ、地域の皆様、工事関係者など、多くの方々の御理解と御協力をいただいており、心より感謝しております。今後も調査成果の情報発信を予定しておりますので、どうぞ御期待ください。

（調査課長　堀木真美子）

附属中学校での授業風景（９月４日）

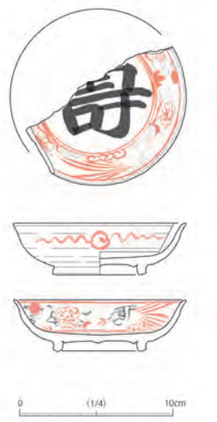
地元説明会の実施の様子（９月14日）

犬山焼について

江戸時代中頃以降になると、大名などが城内や邸内に陶工を招き、趣向にそった焼物作りが行われるようになりました。これらは御庭焼と言われるもので、贈答品など一般流通とは異なる作品を作っていたようです。

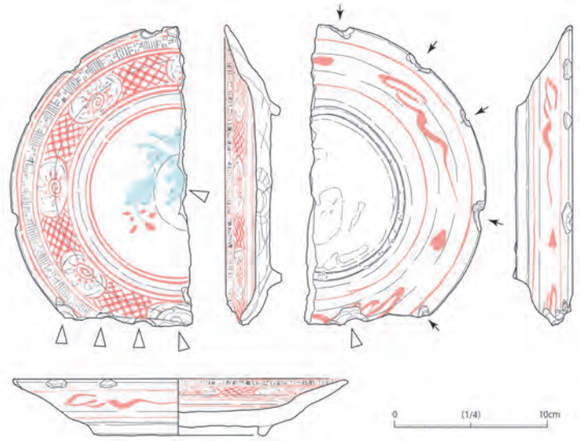
犬山焼は十九世紀に成瀬家の御庭焼として発展した歴史を持っており、中国明時代の呉州赤絵（現在の中国福建省漳州窯の色絵磁器）を手本にしたと言われています。当地に犬山城主成瀬家の中屋敷が確かにあったことを偲ぶ資料と言えます。

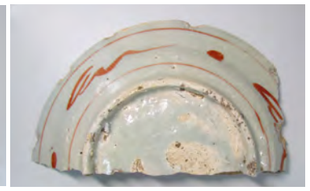
昨年度からの西二葉町遺跡の調査では、瀬戸美濃産の陶器が多い中で、点数は多くありませんが、犬山焼の製品をいくつか見つけることができています。左図は、昨年度調査で見つかった小皿です。「寿」の異字体が中央に記されています。一方、下図の皿は太陽のような絵柄が周囲に配されています。この資料は、焼かれた後に縁に等間隔で規則的に打ち欠かれているようです（黒矢印）。また、その後に敲いて切断したような痕跡もあり（白三角）、捨てられる前に、意図的に壊された可能性も考えられます。（川添和暁）



24Ｄ区出土 犬山焼小皿

西二葉町遺跡発掘通信
No.12　令和7年10月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話　（0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Instagram　https://www.instagram.com/aichimaibun/
X　https://x.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社イビソク




25Ａｂ区出土 犬山焼皿

25Ac区・Ad・Ag区 発掘調査の成果（近世）

25Ａ区での調査成果を総括すると、成瀬隼人正中屋敷の屋敷地裏の景観をよく見ることができる、ということに尽きます。具体的には、①庭関係の遺構と、②陶器などの廃棄場が各所で見つかっていることです。ここでは、①庭関係の遺構について、地元説明会以降の調査経過を、ごく簡単にご紹介します。

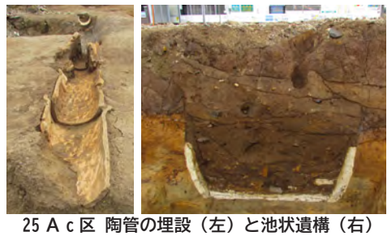
①の庭を示す遺構には、（1）築山、（2）池状遺構、（3）植栽痕があります。特に、築山と池状遺構について触れておきます。

（1）築山は人工的に造られた小山です。裾の周囲に巨礫が配されており、土留めの役割も果たしていたようです。築山を造る際には、浅くくぼめた場所に玉砂利を入れ固めて、その上に順番に盛り土をしたようで、土層断面で確認できます（上段上写真）。

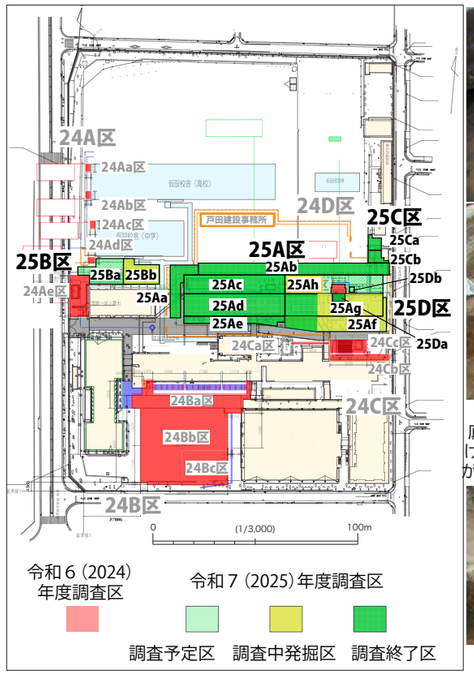
（2）池状遺構では、三和土といわれる当時の硬化剤を用い締め固めて、水を溜めたり、流したりしていたようです。三和土を樋状にしたり、陶管を埋設するなどして、水路にしたりしていました。25Ac区では、一辺一メートルほどの水溜のような小型の池状遺構も新たに見つかりました（上段下右写真）。

（川添和暁）

25Ａc区 築山（上：全体、下：土層断面）



25Ａc区 陶管の埋設（左）と池状遺構（右）



西二葉町遺跡 24 区・25 区 調査区位置図

25Ａd区 池状遺構②
底面に敷き詰められていた陶器・瓦片をとりあげ（上写真）、さらに掘り下げると、三和土の塊が詰め込まれた状態で見つかりました（下写真）。

25Ａd区 池状遺構①
矢印付近の下からは、常滑焼甕の埋設遺構が見つかりました。

25Ac区・Ad・Ag区 発掘調査の成果（近代）

明治時代・昭和時代の遺構について説明します。九月の調査では、愛知県立第一中学校（愛知一中）の基礎や、名古屋帝国大学の関連遺構、終戦後に建てられた愛知県立第一高等女学校（高等女学校）の基礎が見つかりました。西二葉町遺跡における愛知一中・名古屋帝国大学・高等女学校の記録は、これまで文献資料でのみ把握されていましたが、発掘調査によってそれらの記録を裏付けるような成果を得ることができました。

愛知一中の建物は明治四十（一九〇七）年以降に建てられました。基礎はレンガ積みとコンクリートによって作られています。ほかにも粘土と小さい礫がつまった穴も見つかっています。この穴は等間隔に並んでいることから、柱を設置するための基礎であったと考えられます。

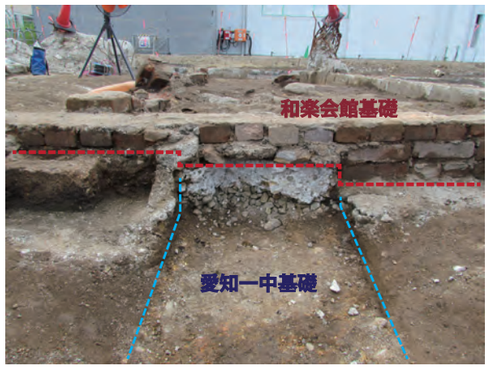
昭和十三（一九三八）年に愛知一中が現地より二キロほど東方の新出来に移転した後は、建物は名古屋帝国大学が利用します。25Ac区では、名古屋帝国大学の関連遺構として、ガラス製の実験器具が大量に捨てられた穴が見つかりました。しかしその後、昭和二〇（一九四五）年五月の名古屋大空襲で被災し、明治時代の建物は大部分が焼失してしまいました。愛知一中に伴う側溝からは、炭や焼けた土、熱をうけて歪んだガラスなど、空襲に伴う被災の痕跡が出土しました。

終戦後、昭和二二（一九四七）年以降に建てられたのが高等女学校です。25Ad区では愛知一中の基礎の上に、高等女学校の講堂「和楽会館」のレンガが積まれている様子も確認できました。

（柳原麻子）

25Ag 区１面目の愛知一中基礎
コンクリート、粘土・礫が詰まった穴（柱基礎？）が見つかりました。写真のように、見つかった遺構はサイズや位置情報、土の色などを記録します。

25Ac 区１面目の名古屋帝国大学関連遺構
穴の中に多量のガラス製実験器具が捨てられている様子。実験器具は自作で、おそらく失敗したものを捨てていたようです。



25Ad 区１面目の愛知一中基礎と和楽会館基礎の重なり
明治時代に設立し、名古屋大空襲によってその役割を終えた愛知一中の基礎の上に、和楽会館の基礎が建てられた様子が発掘調査で確認できました。